２　市民革命　を学ぶにあたって

１．アメリカの独立革命について

歴史総合では、アメリカの独立そのものを知識として学ぶのではなく、市民革命の観点から取り上げています。そのため、独立までの反対運動には触れず、合衆国憲法が女性や先住民、黒人奴隷の基本的人権を認めていなかったことなどにも触れていない教科書があります。

中学校や母国でアメリカの独立について学んだことがない生徒にとっては、知識としては不十分ですが、市民革命については、フランス革命で主に学び、奴隷制度廃止については、国民国家とナショナリズムの単元で、南北戦争を取り上げることで補完されると考えることにします。

２．教科書は啓蒙思想を扱わない

歴史総合では、いきなり市民革命の単元が始まっていますが、その基本理念である人民主権、三権分立などがどのように生まれてきたのかについては扱いません。中学校の歴史で学んできており、概念については中学校の公民で学習済みであるという前提になっているからです。

しかし、生徒たちの出身国の政治体制や社会科の学習内容は国によって異なり、民主主義、多数決、基本的人権などについて、ほとんど知識がない生徒もいます。歴史総合に先立って公共を学ぶカリキュラムになっていない場合、こうした知識を欠いたままでは、結局、市民革命がどういう意味なのか理解できないでしょう。

そこで、三権分立は、今後の学習のためにもここで説明しておくことが必要と考えて、ワークシートに簡単に説明を加えました。

さらに、「資料を読み取ろう」では、「独立宣言」「人権宣言」の内容を「やさしい日本語」で読み取る活動を扱いました（簡単な日本語に書き直したものを「リライト教材」と呼びます）。教科書に出ている資料と見比べて、重要な語句を選びだします。この活動で、「独立宣言」「人権宣言」にはどんなことが書いてあるのかを知り、そうした思想はどこから出てきたのかについては、各自の得意言語で情報検索できるようにしました。十分ではありませんが、興味をもった生徒は自分で知識を広げることができると思います。

３．フランス革命について

フランス革命も、市民革命としての性格を描き出すことが主眼で、教科書によっては、驚くほど事実関係が縮約されています。そのため、何があったのか、どうしてそうなったのか理解できません。そこで、「やさしい日本語版テキスト」の方で、何とか流れがわかるように、少し丁寧にまとめました。興味をもった生徒は、自分の得意な言語で、情報を集めるとよいでしょう。

なお、フランス革命→ナポレオンの支配→ウィーン体制という歴史の流れのどこで、市民革命の意味、国民という意識、ナショナリズムについて取り上げるかは、教科書によって異なりますが、ここでは、ナポレオン時代までを取り上げたので、その最後に、「まとめ」を入れました。

「第三身分」の中には多様な階層が含まれますが、ブルジョアジーについて扱う教科書はごく一部なので、ここでは取り上げませんでした。ただし、次に革命を学ぶのは、ロシア革命になります。革命の性格の違いに気づくためにも、ここでごく簡単に平民の中にも利害の違いがあったことを示しておきました。